「松本城図」について

後藤　芳孝

はじめに

松江歴史館に松本城の絵図があるという情報は、同館が松平直政公の生誕 350 周年を記念した展示会を行う際、松本に資料調査にみえた西島太郎氏からもたらされた。そのおり西島氏から写真版の提供があって、松本城の天守に辰巳附櫓と月見櫓が描かれていないことも指摘された。松平直政公は寛永 10 年（1633）に越前大野から松本へ入城し、寛永 15 年（1638）には出雲松江へ移っている。その間に松本城の辰巳附櫓と月見櫓を増築したので、松平直政公が松本へ入る以前の絵図の可能性はないかという話もいただいた。

そうなると松本城・城下の絵図としては古い時期のものとなり、松本としては貴重な絵図となる。そこで、この絵図（以下「松本城図」と呼称する）について調査をさせていただき、以下の点から検討を加えることにした。

1　描かれているものと特徴の検討
2　松本の地元の資史料からの検討
3　他の絵図との比較検討

一.「松本城図」に描かれているものと特徴の検討

検討に入る前に以下の記述に頻出する城主について一覧で示しておき、理解の一助としたい。

表 1　松本城主等一覧 (1)

氏	名	年代（入封・転封）	主な事績
小笠原氏	貞慶	天正 10（1582） 天正 18（1590）	旧領の松本を回復 現代につながる城郭・城下町の整備を始める
石川氏	数正 康長	天正 18 慶長 18（1613）	天守建築（城主初代） 城郭・城下町整備を続ける
小笠原氏	秀政 忠政	慶長 18 元和 3（1617）	城下町整備継続

戸田氏	康長 康直	元和 3 寛永 10（1633）	城下北部に徒士屋敷建設
松平氏	直政	寛永 10 寛永 15（1638）	天守に辰巳附櫓と月見櫓を増築、城米蔵建築 城下北部に士屋敷を拡大
堀田氏	正盛	寛永 15 寛永 19（1642）	三の丸に蔵屋敷設置
水野氏	忠清 忠職	寛永 19 正保 4（1647） 正保 4 寛文 8（1668）	 このころ現在に続く城下町が完成 このあと、忠直・忠周・忠幹・忠恒と続く
（幕府収公）		享保 10（1725） 享保 11（1726）	
戸田氏	光慈	享保 11 明治 4（1871）	このあと、光雄・光徳・光和・光悌・光行・光年・光庸・光則と続く

「松本城図」には、三重の堀に囲まれた松本城の城郭部分と河川と道と寺社が描かれている。城郭の内部は門や櫓や天守が見取図風に描かれ、蔵の建物は四角で示されている。武家屋敷の一部は区画で示され、御殿の一部も区画で表示されている。六ヶ所の寺は建物を四角で表示し赤色で塗ってあるなかに寺と書く。ただし一寺だけ建物を描く。社については天神（現在の名称：深志神社）部分が詳しく描かれ、建物と社叢と神主の家の建物の位置と神社前にある馬場が描かれる。文字の記載は、道の長さ、本丸などの長さ、天神馬場の幅や長さ、堀幅や深さ、本丸・二の丸の地名、「馬喰町」「寺」

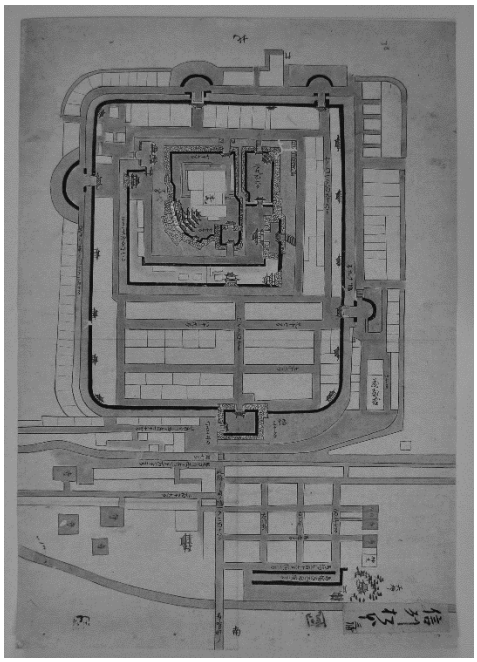


写真１　「松本城図」

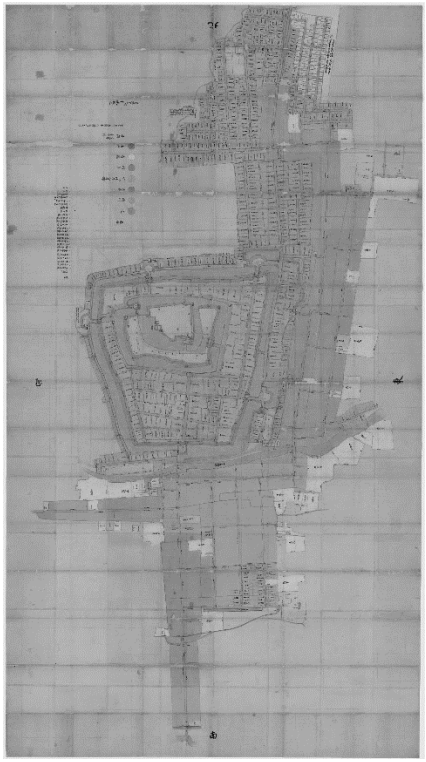


写真２　「享保十三年秋改　松本城下絵図」

や「神主」「天神」といった名称があるだけで、決して多い情報ではない。このなかで建物に名称があるのが「蔵屋敷」という書き込みである。

横版である「松本城図」を、北を上に直して掲載し、比較のために松本の城下絵図として城下町が完成している時期のもので、測量に基づいた典型的な図である「享保一三年秋改　松本城下絵図」を掲げる[2]。

「享保一三年秋改　松本城下絵図」でみるように、松本城下は松本城を中心にして南北に長く、城郭の東側にも広がっている。絵図の中央部に東西に流れる「女鳥羽川」があるがそれによって南北に分かれ、北を北深志、南を南深志と呼ぶ。北深志には武家地と町人地が分布し、南深志は町人地が主に広がる。城郭部分は三重の堀に囲まれた範囲で、台形を逆さにした形になっている。以上のことを頭において松江の「松本城図」をみると次のような大きな特徴がある。

1　城下町の南部（南深志部分）は描かれているが、北部（北深志の北部部分）は全く描かれていない。さらに東部も一部を欠き、町屋部分は描かれていない。

2　松本城の城郭部分の形は、本来は台形であるが、四角に描かれている。

3　本丸内の天守は大天守と乾小天守のみが描かれていて､辰巳附櫓と月見櫓が描かれていない。

１の特徴から、この絵図がまだ北深志の北部の町が出来ていなかった時期の成立か、あるいは北部の町を無視してまったく描かなかったのではないかという検討課題が生じる。

２の特徴からは、松本城の城郭部分がどのような描かれ方をしているのか、このような四角形で描かれた他の絵図があるのかないのか比較する課題が生じる。

３の特徴も同様で、天守がどう描かれているのか、月見櫓や辰巳附櫓を描かない絵図のあるのかを検証する必要がある。

以上の点について、以下で検討を加える。

二．松本の地元の資史料からの検討

「松本城図」の特徴１について、地元の資史料から検討してみよう。

松本の城下がどのように成立していったかについて、成立当時の確定的な史料が残されているわけではないが、水野氏が統治していた享保９年（1729）に完成した松本藩域の歴史・地誌の書である『信府統記』には、次のように記されている[3]。

天正 10 年（1582）武田氏の滅亡後に松本へ入った小笠原貞慶は、城下町と城郭の整備に取り組み、現在の松本城の北にあった町屋を女鳥羽川の南（南深志）へ移動させ、北部（北深志）に東町を割り、麻葉町という名であった町を安原町という名に変えた。これらは他のことと合わせて天正 13 年から 15 年にかけて行われた。

この記述からすると、天正年間には北部（北深志）には道や人家があった。また、天守の築造と城郭の完成は小笠原貞慶以後の石川氏の時代であるから、五重の天守が描かれている「松本城図」の時期に城下の北部に何もないということはない。したがって、「松本城図」に城郭の北の部分が全く描かれていないのは、そこを省略したからであるという結論になる。「松本城図」は城郭より北側と東側の一部を省略し、城郭部分を中心にして南深志も描いた図である。

つづいて、寺と「蔵屋敷」と書き込まれた部分について検討する。

南深志の部分には寺社が描かれている。寺名はないが、南西方向に書かれている寺は、浄林寺、往生院・一行院（浄林寺寺中）で、一寺名不明である。建物が描かれるのは生安寺である。東南部の天神の北に描かれる寺は、瑞松寺（伝慶長 19 年）、長松院（伝慶長 15 年）、法泉院（伝寛永元年）、妙覚院（のち、元和元常福寺となる）であろう[4]。

ここで、検討したいのは、城主の菩提寺が置かれた場所である。水野氏の時代と後の戸田氏の時代には、女鳥羽川の南で伊勢町の北に菩提寺が置かれた。ところが「松本城図」には他の寺はあってもそれが描かれていない。水野氏の時代には浄林寺の西に菩提寺春了寺がおかれた。春了寺は水野氏二代忠職が城外に建て、その後明暦二（1656）年に浄林寺の東にあった極楽寺を本町へ移して、そこに伽藍を建てたという[5]。春了寺が描かれていないことは、「松本城図」が明暦２年以前の様子を描いている可能性がでてくる。

次に、「蔵屋敷」とかかれた建物についてである。これは寛永 15（1638）年から 19（1642）年まで城主であった堀田正盛の代に「上土ニ土蔵ヲ建ル、其前上ゲ土ニ日蓮宗ノ本立寺アリシヲ、今ノ所へ引移ス」とあって、ここに蔵が造られたのは寛永の後半であるとされている[6]。これからすると「松本城図」は堀田氏が統治していたより後、寛永 15 年以降の様子を描いていることになる。

三の丸外側の北部と西部に目をむけると、一番外側の堀の外に区画がされている。これは武家住宅の区画である。この部分については、水野氏二代目忠職の代（正保 4～寛文 8　1647～1668）に「西堀町歩行町北馬場出来ル、西ニ小河町出来ル後鷹匠町ト云」とあって、この城主の代に町が出来た[7]。これで城下の形が整った。したがってここに屋敷割が描かれていることからみると「松本城図」は正保 4（1647）年以降の様子が描かれている可能性が指摘できる。

二の丸の西側部分に長方形の建物が２棟描かれている。この位置にある建物は「八千俵蔵」と呼ばれている蔵である。これは松平直政の治世中に建築された幕府直轄の非常用米備蓄倉庫で、幕府はこの設置を寛永 10（1633）年に命じている[8]。したがってこの蔵が描かれていることから寛永 10 年以降の状況を描いていることになる。

以上の検討結果をまとめると、「松本城図」の特徴の一として上げた、城下町の北部を全く描かないのは、そこに城下町が無かったからではなく、省略して描かなかったということが明白になった。次に、絵図に描かれたものの検討から、描かれたものは寛永 10 年（1533）より後、より限定すれば正保 4 年（1647）より後、明暦 2 年（1656）年より以前にあったものが描かれている可能性があることが指摘できた。

三.「松本城図」と他の絵図との比較検討

つづいて、他の絵図との比較検討をしてみよう。まず「松本城図」の特徴の２である、城郭部分を四角で描くことについてである。現在把握している松本城の城郭部分を四角形で描く絵図は、次の６図である。

ア　『主図合結記』所載の絵図[9]

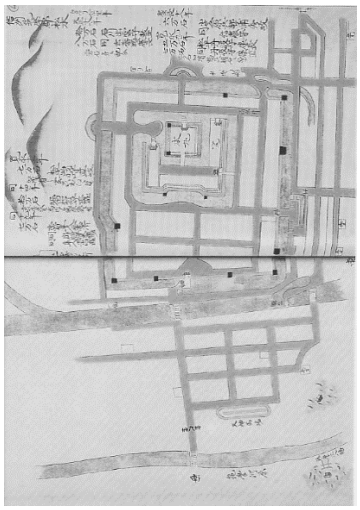
イ　国会図書館「信州松本城」(10)

ウ　神戸市立博物館南波コレクション「水野氏時代松本城古図」(11)

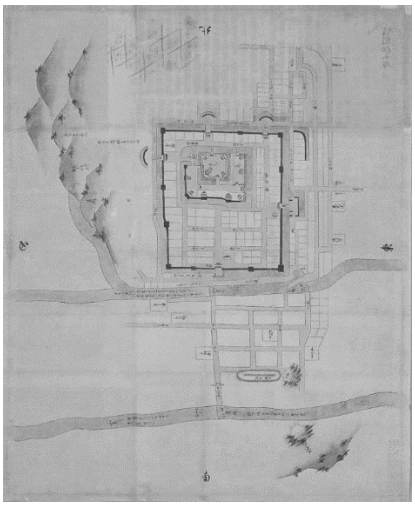
エ　国立公文書館所蔵「信州松本城図」(12)

オ　個人蔵（東京　石川義徳氏）「元禄年間松本城並びに家中屋敷割図」(13)

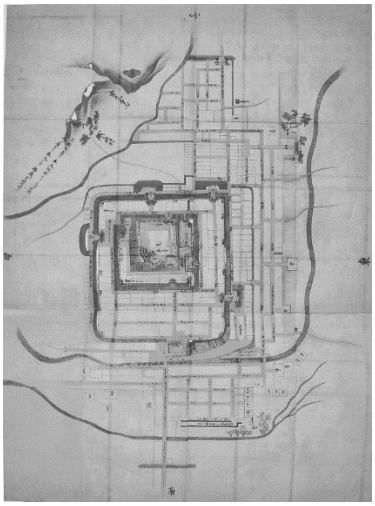
カ　尊経閣文庫蔵「信州松本　以正極図縮図」(14)



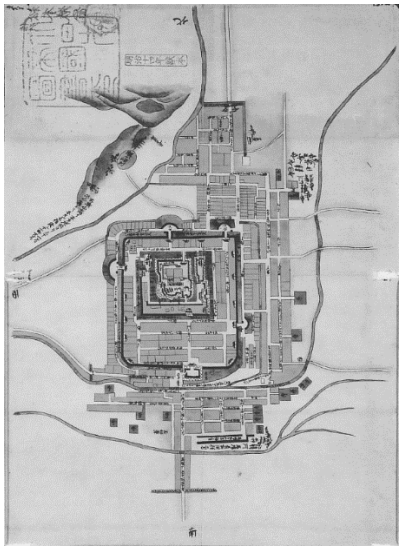
ア『主図合結記』



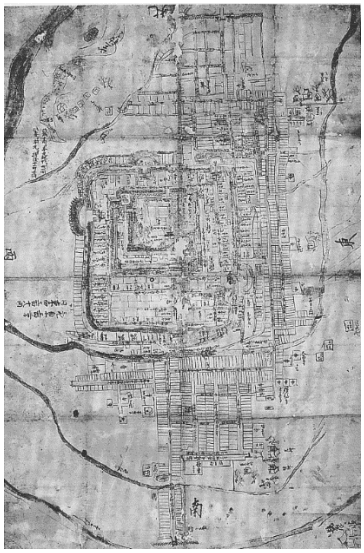
イ国会図書館



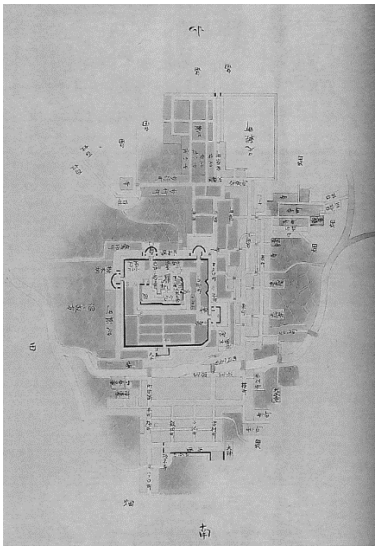
ウ神戸市立博物館



エ国立公文書館



オ個人（石川義徳氏）



カ尊経閣文庫

各図の特徴を概観する。

ア「主図合結記」所載の絵図

『主図合結記』の原本の成立期について、矢守一彦は正保初年以前という年代も一応浮かび上がると記している。この図では城郭部分を四角形で描き、南深志部分は描くが、城郭より北側の北深志部分はごく一部しか描かれていない。その意味では「松本城図」に近い構図であるが、城郭内の建物は絵画的に描かず、櫓は■で表現しているなど細部は大分異なる。

イ　国会図書館収蔵の絵図

城郭と城下町の南部と北部の一部を描き、西の里山と北部になまこ状に耕地も描く。城郭

部分は四角形で城壁を黒線、平櫓を■で示し、門及び二の丸内の櫓は絵画で描くが実際には無い櫓が描かれたりしている。天守は大天守のみが描かれる。寺院に名称が記されていて、水野氏の菩提寺春了寺が描かれているので、明暦 2 年以降の状況を示していると思われるが、極楽寺・浄林寺・乾瑞寺の位置が誤っているなど不正確なものになっている。

全体的には、『主図合結記』と似た構図をしている。松本城下を描く絵図にア・イのように城郭と南深志を描き、北深志の北部をごく簡単に描く絵図の系統があったことを示唆している。

ウ　神戸市立博物館南波コレクション「水野氏時代松本城古図」

この図は、松本の城郭と城下町をすべて描いている。描き方もしっかりしており、完成度は高い。さらに城郭部分の建物は絵画的に描かれ、多少の違いはあるが、城郭の描き方や、深志神社（天神）の前の馬場の描き方が「松本城図」と共通であり、この系統の図から「松本城図」が描かれた可能性がある。しかし、この図では天守に月見櫓が描かれている。

成立年代は明記されていないが、月見櫓が建築された後の成立である。水野氏の菩提寺である春了寺が描かれていないことから、春了寺が女鳥羽川左岸に移転してくる明暦 2（1656）年以前の状況を描いているとみてよさそうである。東北部に足軽町が描かれていない。ここの足軽町の成立は水野氏が入部してからの成立といい（「大守累年記」）、このことからは寛永 19（1642）年水野氏入封前の状況とも考えられる。

エ　国立公文書館所蔵「信州松本城図」

この図は、ウと同様に松本の城下町をすべて描く。原図ではなくいつの時代かの写しのように見受けられる。また、ウ図と共通性を持っている。成立年代の記事は無いが、ウ図と同様に北深志北部の北東の方向に武家屋敷が描かれていず、ウ図と同時期頃の様子が描かれている可能性がある。さらに城郭内の建物の描き方を見ると、天守は大天守と乾小天守だけで月見櫓等が描かれていない。また門の絵画的な描き方や城郭を囲む塀を黒線で描く点、南西部の寺院の配置や天神馬場の描き方も「松本城図」とよく似ている。ここにも八千俵蔵と蔵屋敷が描かれていて、松平直政時代と堀田正盛時代の建物が描かれている。

オ　個人蔵（東京　石川義徳氏）「元禄年間松本城並びに家中屋敷割図」

この図は、ウ・エと同系統の絵図であるが、絵図中の屋敷地に人名を記すのが大きな特徴で、この人名から金井圓氏は元禄 3～9 年の段階のものであることなど詳細な検討を加えている（同氏「石川家秘蔵松本城並家中屋敷割図」『近世大名領の研究』所収）[16]。また、東北部に足軽町を描いている。この絵図は地元での情報をしっかり盛り込んだ絵図で、城郭を四角形に描く系統の最終段階のものではないかと思われる。

ウ・エ・オは同一系統の絵図とみることができる。

カ　尊経閣文庫蔵「信州松本」に関して

尊経閣文庫の諸国城図は、前田家家臣で軍学者の有沢永貞（寛永 16～正徳 5）が寛文 6（1666）年から元禄 4（1691）年にかけて集めた絵図を同一規格に編集しなおして、元禄 5 年に完成させたもので、この年はくしくも松江の絵図の綴り込の袋に書かれた年号と一致す

る。また、描かれた統一した紙の大きさは 29cm×40cm と、これも松江の絵図とほぼ同じである[17]。

ここにも松本城の図があり、城下町全体を描き城郭部分は四角形にかかれている。しかし、「松本城図」とは異なる描き方である。城郭部分は高塀を黒色で強く描き、櫓・門などの建物は描かない。水野氏の菩提寺の春了寺（春立寺と誤記）を、東北部に足軽町が描かれている。特徴的な描き方として、正保の城図の描き方のなかに見られる、田地部分をナマコ壁風に描く方法がとられている。水野氏の菩提寺が描かれることから、この絵図は明暦２(1656)年以降のもので、上記の系統のものとはまた別系統のものである。

いっぽう、松本の地元に残る絵図では、城郭部分を四角に描くより実際の形に近い逆台形に描く絵図が多く、先に掲載した「享保一三年秋改　松本城下絵図」が典型としてあげられる。それ以前でも元禄期の絵図には逆台形に描くものが出現し、それが実際のすがたであることから主流になっている。このことから見るに、松本の場合城郭部分を台形状でなく四角形で描く図は、成立が古い時期のものである。

検討資料にあげた六図の成立も、年代が推定できるものからみても遅くても元禄期以前に位置づき、江戸時代前期に成立をみた絵図が原本になっていることは確かである。あわせて松江の絵図類が元禄五年の年紀が記された袋に入っていることを勘案すると、「松本城図」は松本城下絵図の初期段階の城郭を四角に描く時期に描かれた原本がもとになっていることは確かである。

次に、特徴の３である天守が大天守と乾小天守しか描かれていないことに関してである。周知のように辰巳附櫓と月見櫓は寛永 10 年から 19 年までの松平直政在城時代に建築された。したがってこれが描かれないのは、それ以前の天守の状況であるという推測ができる。しかし、これについては六図の内のエの図が、「松本城図」と同様に月見櫓と辰巳附櫓を描いていない。天守に月見櫓と辰巳附櫓を描かない絵図が「松本城図」以外に存在している。エの図には松平氏時代の建物とその後の堀田時代の建物が描かれているので、月見櫓等が描かれていないことをもって、松平時代以前のものと断定することはできない。

「松本城図」は、元禄五年の年紀が記された袋に入っていることからそれ以前の成立であることは間違いなく、松本城下絵図のうち初期段階の、城郭を四角に描く時期に描かれた原本がもとになって成立している。また、部分的に類似の描き方をした絵図がほかに存在している。天守に月見櫓を絵が描かない絵図も他に存在していることを指摘した。

おわりに

検討してきたことをまとめて終わりたい。

「松本城図」の特徴の１である城下町の北部分を描かないのは、例示した六図のうちア・イの系統の絵図に類似する。北部を描かなかったのは、そこに町がなかったから描かなかったのではなく、絵図の中心を城郭に絞ったことにより、城下町の北部と東部の一部が省略された結果である。

特徴の２である城郭部分が四角形に描かれることは、六図に共通するが、城下町の南部の描き方は、ウ・エ・オ系統の絵図を原型としている。特に「松本城図」は国立公文書館所蔵の絵図と城郭部分の

描かれ方が類似する。

松本の地元に残る史料と比較すると、寛永 10 年以降の松平直政の在城時代の建物と寛永 19 年以降堀田正盛の在城時代の建物が描かれている。松本城武家地割では、鷹匠町や西堀に正保 4 年以降の水野忠職以降につくられた区画が描かれている。

水野氏が編纂した『信府統記』の「松本城地形間数記」に「堀田加賀守正盛ヨリ忠清公へ渡サレシ絵図アリ、其後正保元甲申年、忠清公ヨリ公義ノ（へヵ）指シ上ケラレシ絵図ト忠直公ノ時分間ヲ改メ正シテ出テ来タル絵図ト共ニ、三通リ今ニアリト云ヘトモ」とある[18]。水野氏が堀田氏から引き継いだ時の図面と、水野氏が松本へ入封した寛永 19 年から 2 年後の正保元（1644）年に幕府に提出した正保の城図の図面と、元禄期の図面があったことが記されている。これらはいずれも地元で引き継がれたあるいは作成された絵図であるから、城下の描かれ方が中途半端なものであったことは考えられない。これらの絵図はいずれも現存していないし、特に松本城の場合は正保の城図が残っていないので、これがどのような描かれ方をしていたのかわからないのが残念であるが、城下の北部を描かない「松本城図」はそれらの系統の絵図とは別物で、城下全体を描く目的ではなく、主に城郭を描くところに目的があって成立した絵図である。

その成立年代は、確定することはできなかったが、描かれている建物の年代の検討からは寛永 10 年以降明暦 2 年以前の物が描かれていると考えられる。ではその間のいつ描かれたものかということになるが、一つの見通しとして正保の城図成立以前の松本の様子を描いている可能性が高いと考えている。その年代は寛永の末期から正保あたり、城主でいうと松平氏の後の堀田正盛から水野忠清のあたりではないだろうか。松江に残るほかの城図の検討結果によってはこの推定が変更される余地がないとは言えないが、現在のところ以上のように結論づけておきたい。

註

（1）松本城では、天守を建築した石川数正を城主初代としているが、ここでは城下町の建設の関連から小笠原貞慶から掲載した。

（2）『松本城・城下町絵図』所収（松本市教育委員会　平成 28 年）

（3）『信府統記』（『新編信濃史料叢書』第五巻　信濃史料刊行会　昭和 48 年）

（4）寺院の開創年代については『松本市史』下巻（松本市役所　昭和 8 年）による。

（5）注 4 と同じ

（6）注 3 と同じ

（7）「太守累年記」（河辺文書　松本市文書館寄託）

（8）柳谷慶子「江戸幕府城詰米制の成立」（『日本歴史』四四四号　昭和 60 年）古川貞雄「信州城詰米の運用と天保飢饉（一）」（『信州史学』第 11 号　昭和 61 年）

（9）『主図合結記　全』（犬山市　昭和 62 年）所収図を使用

（10）国会図書館　日本古城絵図中　東山道之部（2）所収　一四一「信州松本城」

（11）「金沢・名古屋」『日本の古地図』⑫所収（講談社　昭和五二年）

（12）国立公文書館所蔵

（13）金井圓『近世大名領の研究』（名著出版　昭和五六年）付図。『太陽コレクション城下町古地図散歩３　松本・中部の

城下町』にも所収（平凡社　平成 8 年）

（14）『尊経閣文庫蔵　諸国居城図』所収（新人物往来社　平成 12 年）

（15）『城郭図譜　主圖合結記』（名著出版　昭和 49 年）矢守一彦　解説編

（16）金井圓「石川家秘蔵松本城並家中屋敷割図」（『近世大名領の研究』）

（17）注 14 と同じ　解説執筆千田嘉博

（18）注 3 と同じ

（ごとう・よしたか　松本城管理事務所研究専門員）